

令和6年度実績報告書

○補助事業の目的・必要性

●総論

九州大学の理念等に基づき、我が国の医学・医療の多彩な分野において指導的な役割を果たし、アジアをはじめ広く世界で活躍する医師・医学研究のリーダーの養成を積極的に推進する。

その機能強化につなげるため、本事業における臨床研究面では、若手研究者による横断的な組織を設立し、診療科の枠を超えた交流を促進し、革新的なアイデアの創出を目指す。

また、優秀な臨床研究支援人材を登用し、持続可能な体制となる改革を行う。

次に、教育面では、診療参加型臨床実習充実のため、医行為経験が円滑に進む体制の整備および医学教育学上効果が確立している Near Peer Learning を卒前卒後シームレスに導入し、また医行為同意書取得の簡素化などの実現を目指しながらも、教員の負担軽減も可能にするモデル組織の構築実現を目指す。

●具体的な事業内容

- ① 多くの患者のデータを収集・分析し、治療が本当に役立っているのか、効果を発揮しているのかなど、より実態に即した治療となっているかの検証のため、全国の主だった病院と多施設共同でリアルワールドエビデンスの創出を目指す。
- ② 患者さんや治験協力者を今後増加していくために、負担が少なくコスト抑制も期待できる分散型臨床試験（DCT）の実装による医師主導治験の推進。
- ③ 臨床研究の国際展開を推進するため、マレーシアやインドネシアの治験機関と提携し、国際共同臨床研究のためのネットワーク構築や薬事規制研究を推進する。
また、マレーシアやインドネシアのアカデミアと連携し、現地で特にニーズの高い感染症やがんに関する国際共同研究を進め、本学がアジア諸国で実施する観察研究を含めた臨床試験を支援する他、現地ニーズに見合う医薬品、医療機器シーズを育成し国際展開に繋げる。
- ④ 生成 AI によるプロトコル作成支援、論文作成支援の利活用に向けた研究を推進するなど、ICT や DX の活用によって研究支援業務を効率化し、臨床研究の活性化を目指す。
- ⑤ 本学は、橋渡し研究推進拠点としての機能も担っており、グラント支援事業、企業連携イベントの企画や参加等、各種マッチング支援を通じて企業等や他分野との共同研究を推進してきたが、個々の活動を充実させることで共同研究推進を図る。

- ⑥ 基礎研究の実績を活用した臨床研究（橋渡し研究）の活性化のため、診療科の枠を超えた協働と交流を促進し、革新的なアイデアの創出を目指す。
- ⑦ 教員負担の軽減のため、卒前卒後のシームレスな屋根瓦教育体制を構築する。
具体的には専攻医、研修医、医学生を対象とした教育スキルトレーニングオンラインプログラム（ニアピアラーニングプログラム：NPL-プログラム）を実施する。
- ⑧ 教員の大きな負担となっている患者への同意書取得業務について、DX化を進め、教員の負担軽減を図る。
- ⑨ 医学生の臨床実習記録の電子化、可視化のため、臨床実習記録システムを導入し、学修内容を簡便に電子上に蓄積し自己の学修到達度が確認できるシステムを構築する。
この取り組みは教員による評価の簡素化にもつながる。
- ⑩ 現場でのより安全な医行為の実施を目的として、侵襲性の高い手技を中心に、シミュレータを活用し、プラチナナースによる実習を行い、必要な医行為の充実を図る。
- ⑪ コモンな疾患の経験不足の改善や医行為の経験率の向上のため、地域医療実習を充実させる。
臨床実習コーディネーターを配置することで、医学生がコモンな疾患を十分経験し、臨床能力を着実に身につけさせるための実習協力施設をさらに増やし、地域における医学生の診療参加型臨床実習の充実及び教員の負担軽減の両立を実現させる。
- ⑫ 教育に積極的に取り組む教員への評価を充実するため、教員の教育実績を可視化し、業績評価として活用できるよう、臨床実習指導医認定制度の構築を行う。
また、日本版臨床指導医評価表（Japanese Clinical Teacher Evaluation Sheet：JaCTES）を用いた他者評価も活用する。
- ⑬ 医師の働き方改革への対応として、多職種連携によるタスク・シフト／シェアの推進及びICTや医療DXの活用による業務の効率化等を推進することで、医師の教育研究時間を確保する。
さらに、男女にかかわらず育児・介護等の為に離職することなく十分に自身の能力を発揮し、キャリアを継続できる働きやすい環境を作ることに取り組む。

○補助事業の実績

●事業実績の概要

本事業における臨床研究面では、若手研究者による横断的な組織にてメンターを担う学内で募集・指名し、6名を確保した。

初年度には、カリフォルニア大学サンディエゴ校をメンターの1名、ARO(*1)のスタッフ1名で訪問・査察し、橋渡し研究・臨床研究支援の先進的な取り組みを学んだ。

また、生成 AI により臨床試験の品質管理に関わる業務の効率化が可能か検証した。

さらに、優秀な臨床研究支援人材の登用し、持続可能な体制となる改革を行った。

教育面では、下記に示すように診療参加型臨床実習充実にもついで、事務雇用、教員募集、シミュレータの購入、教員負担軽減のための同意書 DX 化の準備を行った。

Near Peer Learning を卒前卒後シームレスに導入するための E ラーニングプログラムを構築した。

●本年度の補助事業実施計画と具体的成果

- ① 診療科の枠を超えた交流促進のための組織メンバーおよび臨床研究メンターの参加希望を募り、若手医師のグループによる教育を推進するための準備開始。

若手医師の会のメンターを6名確定し、2024年度は、そのうち1名と、AROのスタッフが、カリフォルニア大学サンディエゴ校の橋渡し研究支援拠点及び、AROを訪問し、先進的な臨床研究支援を学んだ。

- ② 臨床研究を効率化する ICT 等の導入開始。

ユビー社との協議。

Buzzreach 社に業務委託し、治験の支援業務のタスクの一部を生成 AI で作成し、ノウハウを取得した。

- ③ 臨床研究支援者のキャリアパス設計に向けて協議を開始。

臨床研究支援組織である ARO 次世代医療センターが導入している人事評価を活用したキャリアパス設計及び無期雇用を含めた協議を開始。

- ④ 臨床研究支援職として教員および臨床研究専門職員等の配置による研究支援体制の整備。

臨床研究支援組織である ARO 次世代医療センター及び関係部署へ臨床研究支援人材を配置かつ、若手研究者による横断的な組織メンター6名を指名。

優秀な臨床研究支援人材の登用持続可能な体制となる改革を行う体制を整備した。

- ⑤ DCT（分散型臨床試験）推進のための準備。

電子カルテ内に作成した EDC-電子カルテ連携システムの改修を行い、産婦人科の研究においてテスト運用を行った。

治験薬（注射薬）を専門業者ではなく、宅配便での運用する手順と、シミュレーションを実施した。

また、SOP の整備も行った。

- ⑥ 授業開講準備、NPL-プログラム開始準備。

専攻医、研修医を対象とした教育スキルトレーニングオンラインプログラム（ニアピアラーニングプログラム）：

NPL-プログラム) の準備を行い、完成させた。2025 年度から運用を開始する。

医学生へは、NPL の授業を実施する。

また学内でも NPL 活動を普及推進するための準備会議を行った。

将来的には九大モデルを全国に還元することを念頭に学外の協力者にも参画いただいて準備を進めている。

⑦ 担当部署と同意書取得の DX 導入準備打ち合わせと導入準備。

教員の大きな負担となっている患者への同意書取得業務について、DX 化を進めるため、電子カルテ管理部門（メディカルインフォメーションセンター）と準備の打ち合わせを開始した。

⑧ 九大のアウトカム仕様に教育実績評価に係るシステムをカスタマイズする作業開始。

医学生の臨床実習記録の電子化、可視化のため、臨床実習記録システムを導入する準備を進めている。

九大によりマッチしたプラットフォームの選定を行っている。

併せて事務作業を滞りなく推進するため、事務の雇用と、作業を円滑に進めるための環境整備を行った。

⑨ シミュレータ教育の充実に向けたプラチナナース（テクニカルスタッフ）の募集と配置等の準備。

適任のプラチナナース雇用が難しかったため、事務職員を雇用し、シミュレータ教育の充実が図れるよう体制整備を行った。

診療参加型臨床実習を推進するためのシミュレータを購入した。

⑩ 地域医療実習の充実に向けた実習コーディネーター、事務補佐の配置等による実習支援体制の整備。

地域医療充実に向けた実習コーディネーターを 2025 年度から雇用するため教員を募集した。また、事務体制強化を行った。

⑪ 臨床実習指導医認定制度導入準備。

制度の準備にあたり、誰をどのような形式で認定するか、また履修内容をどうするかについて検討を行った。

⑫ ICT や医療 DX の活用による業務の効率化。

業務効率化による医師の負担軽減と、ゲノムデータのデータベース化による臨床研究の促進に向け、ゲノム検査に関するデータを一元管理するためのゲノム検査業務支援システムを導入した。

医師の教育研究時間の確保に向けて、環境整備を進めた。

(*1) [九州大学病院 ARO 次世代医療センター](#)